

《論文》

社会福祉実践の多様性を把握するための
視点の検討

—文化・集団・個人の相互関連に着目して

中山 慎吾

社会福祉実践の多様性を把握するための 視点の検討

—文化・集団・個人の相互関連に着目して

中山 慎吾

和文抄録：福祉実践に関わる人々は、感情、思考、知覚、倫理等のさまざまな側面において“選択”を積み重ねつつ実践をすすめている。本稿では、実践主体の経験の多様性を把握し考察するための基礎視角を検討する。福祉実践は「行動」の一種であり、「外行動」とともに「内行動」にも注目することができる。福祉実践を把握する上で、個々人の行動の背景にあるパーソナリティ（個人的行動体制）、および“行動を秩序づけるプログラム”である文化（集合的行動様式）の両概念を再検討する。福祉実践は、行動様式・行動・行動体制という三者間の動的な相互関連の中で展開していると考えられる。文化（集合的行動様式）の生成における個人と集団の柔軟なはたらきに注目することにより、実践主体の経験の多様性を把握しやすくなると考える。個々人の柔軟なはたらきに関してはT. S. EliotやM. Halbwachsの文化論を参照し、集団の柔軟なはたらきに関してはG. Lefebvreの集合心性論を参照する。

Key Words：ソーシャルワーク実践 経験の多様性 文化 パーソナリティ

1. はじめに—福祉実践における経験の多様性

ソーシャルワーク実践（あるいはより広く福祉実践）における実践主体の内面では、様々な種類の“選択”が行なわれている。たとえば、次のような選択である。福祉実践の場において、対象者や同僚に対してどうふるまえばよいのか。その場における自分の心の状態や感情の持ち方をどうするのが望ましいのか。施設と一般社会との関わり合いについて、どのような見通しをもてばよいのか。対象者をどのような人物としてイメージするのがよいのか、等である。

福祉実践に関わる人々は、感情、思考、知覚、倫理等のさまざまな側面において“選択”を積み重ねつつ実践をすすめている⁽¹⁾。そのような人々の心を眺めることができるとするなら、そこには“厚みの

ある体験”と呼べるような多様な経験が含まれているように。

社会福祉の営為を「政策」「実践」「運動」という3つのレベルに区分する場合、福祉政策と福祉実践の関連は次のように整理することができる⁽²⁾。福祉実践は、福祉政策からその媒介機能として位置づけられ、規定をうける。その一方で、福祉実践は内在的条件や組織的条件からも規定をうけ、福祉政策の形成過程にも作用する。内在的条件とは、職業倫理や階級意識など、公務労働者や福祉労働者の個々人がもつ内的条件である。

福祉実践は、福祉政策から規定されるとともに、逆に福祉政策に対してはたらきかけもする。ただし、福祉政策へのはたらきかけがあるかどうかに関わらず、福祉実践の主体の内面には、福祉政策の遂行への行為命令のみにとどまらないものが含まれる。

たとえば対人福祉サービスを行なう場合、サービ

スの対象者に対する感情は、そのサービスをより人間味豊かなものにしうる。愛情がわなくて苦しんだり、愛情を抱こうと努め続けることに疲れてしまったりすることもあるかもしれない。いずれにしろ、対象者への感情の多様なあらわれは、政策を実施するために必要な行為規範の中には、必ずしも含まれていない。愛情を対象者に抱こうとすることは、文化的な拘束を受けつつ、福祉実践主体による個人的選択のあらわれでもありうる。

ところで、福祉実践における“厚みのある体験”への注目、たとえば代表的な社会事業史研究者の1人である吉田久一による「実践を志向する主体的創造的視点をくみいれ、歴史的社会的実践としての社会事業の枠組を考えられないか」という問題意識と重なる。「社会事業は社会問題の解決という創造的実践的任務を担っている、社会科学的論理を基礎としつつも、実践目的への創造的志向、即ち主体性も問題とならざるを得ない。」(吉田1974: 6, 9)。

“実践を志向する主体的創造的視点”、“実践目的への創造的志向、即ち主体性”といった表現からは、実践主体の能動的はたらきを重視する姿勢が示唆される⁽³⁾。実践主体の能動性を重視しつつ福祉実践の研究を行なう場合、法則性の探求を第一義的な目標とするばかりでなく、歴史上に存在する特定の社会的行為を、その内面的動機の再構成を通して把握することも、研究目標のひとつとなりうる⁽⁴⁾。

このような研究方向を検討するにあたって、秋山の次の議論は参考になる。秋山(1982)は、福祉の心、福祉の思想、社会福祉の価値、等々とよばれるものを一括して「社会福祉哲学(広義)」と呼び、3種に分類している。「福祉の倫理、ソーシャルワークの哲学(福祉実践の哲学)」「福祉の心、社会福祉の価値観・人間観」「社会福祉哲学(狭義)」である。

「福祉の倫理、ソーシャルワークの哲学(福祉実践の哲学)」(以下「福祉実践の哲学」と呼ぶ)は、ソーシャルワーカーのあるべき姿、クライアントへの態度を示したものであり、次のように説明されている。「人格でもって人格に接していくソーシャルワーク実践にあって、まず、自己の内面を点検し、自らの『内なる差別』を自己告発し、日々の実践にあって、クライアントに接し、『共に』あることを願う中で、クライアントとの出会いによって、自らが豊かになり、解放されていくというソーシャルワーカーの姿

を探究していく姿勢を示したものが、これである。」ソーシャルワーカーの倫理綱領は、それが最も集約的に明文化されたものである(秋山1982: 15)。

つまり「福祉実践の哲学」は、実践主体が福祉実践にあたる際に適用される理想あるいは規範である。それに対し「福祉の心、社会福祉の価値観・人間観」は、実践主体に限らず多くの人々がもつことを期待される理想あるいは規範である。その中核にあるのは「透徹した人間理解を求め、人間尊重の立場に徹底的に立つことを志向することであり、また、相互依存・相互援助によらなければ生きていけないという視点から、社会福祉への国民の理解と関心を喚起しようとする訴え」(秋山1982: 15)である。

「社会福祉哲学(狭義)」は、「社会福祉実践と福祉政策の根底に位置すべきものであって、それらを根源的に支えていく、平和・人権・安全の存在」であり、それらの基盤となる「国際社会の平和」をも視野に入れることが重要だとしている。なお、広義の社会福祉哲学の中に「社会福祉哲学(狭義)」を含めることによって、福祉をめぐる思想が、単に人間関係の場における人間理解・人間尊重に留まらないものとなりうる(秋山1982: 15)。

なお、倫理綱領に関して、秋山(1989: 18)は別の論考で次のように述べている。

「倫理綱領は、専門職としてのワーカーの実践において、その基盤となる価値観を掲げ、ワーカーの基本的姿勢・あるべき姿を提示し、その実践の向かうべき方向(行動の指針、努力目標)を指し示し、逆にしてはならないこと(禁止条項)を示し、さらには一人前のプロフェッションになるためのコツ(最小限の行動準則)を教える、のである。」

引用文のうち“基盤となる価値観”は「社会福祉哲学(狭義)」、それ以外は「福祉実践の哲学」にあたるといえる。実践の基盤となる価値観が倫理綱領の中に記されている例としては、日本ソーシャルワーカー協会倫理綱領の前文に“平和擁護、個人の尊厳、民主主義”という表現がある(秋山1989: 18)。これは2005年に承認された倫理綱領でも、「平和を擁護し、人権と社会正義の原理」という表現で受けつがれている。以上のような秋山の議論は杉野(2011: 83-89)のいう「理念知」とほぼ重なる。倫理綱領はその後改定されつつ重視されており、国際的には国際ソーシャルワーカー連盟において「ソーシャル

ワークの定義」などで「社会福祉の哲学」にあたる内容が展開されている。

「福祉実践の哲学」に関する秋山自身の関心の中心は「倫理綱領」による表現の洗練にあるように思える。しかし本稿では、社会福祉の哲学が、いわば生身の福祉実践主体においてどのように作用しているかに注目したい。「福祉実践の哲学」では主に実践主体が“どう行動すべきか”に焦点が当てられている。しかし、それを実行する人間はときに弱い存在であり、思うようにできなくて苦しみ悩んだり、思わぬ出来事に喜びを感じたり、といった経験をもしつつ、日々の実践に臨んでいる（中山1994）。

福祉実践に携わる人々の現実に向き合った福祉実践家の1人として、“知的障がい児（者）の父”と呼ばれることのある糸賀一雄をあげることができる。1954年の糸賀の編著書『勉強のない国—忘れられた子の保母の記録』では、糸賀の文章とともに3人の保母の文章が載せられている。糸賀はまえがきで次のように書いている（糸賀1954：2-4）。学園の保母たちは「仕事が好きで好きでたまらない」「面白くてやめられない」と言っている。この本にあるのは「保母たちが自分の受けもっている子どもらと一緒に泣いたり笑ったりしてくらしてきた、いつわりのない感想」である。3人の保母は、自分自身のその時ごとの正直な気持ちを交えつつ、子どもたちとの具体的なやりとりを描いている。仕事の大変さばかりでなく、仕事の喜び、やりがいも表現されている。

福祉実践に携わる人たちの実践に関するこのような著作は、“福祉政策との相互関連”といった観点から考察することが全くできない訳ではないだろうが、むしろ別の視点からも考察しうる。秋山のいう「福祉実践の哲学」との関連性を念頭におきつつ、より広い社会的文化的文脈の中で理解し考察することができると思われる。

2. 研究目的と研究方法

本研究では、福祉実践主体の主体性や創造性を重視する姿勢をふまえ、「福祉実践の哲学」に関心をもちつつも、実践に携わる人間の現実にも焦点をあわせる。そして、「政策との関連性」のみに還元されない実践の豊かさを大切に把握することを目指したい。このような問題意識に基づきつつ、ソーシャル

ワーク実践（あるいは福祉実践）における実践主体の経験の多様性を把握するための基礎視角を検討することを本研究の目的とする。

福祉実践を把握するための視角をあらためて検討するにあたり、社会福祉研究に限らず社会学や文化人類学などの人文社会科学研究を参考にし、基礎的な概念の再検討を試みる。その際、福祉実践が「行動」の一種であること、そして“厚みのある体験”を念頭におくと「外行動」とともに「内行動」にも注目しうることを着眼点の一つとする。また、福祉実践を把握する上で、個々人の行動の背景にあるパーソナリティ（個人的行動体制）、および“行動を秩序づけるプログラム”である文化（集合的行動様式）の両概念を再検討する。そして、文化（集合的行動様式）の生成における個人と集団の柔軟なはたらしに着目することにより、実践主体の経験の多様性を把握しやすくなると考える。

3. 基礎概念の検討

—行動・行動体制・行動様式

福祉実践は、いうまでもなく「行動（behavior）」の一種である。人間の行動を把握する上で、本稿では「行動体制」と「行動様式」という次元を含めて検討する。福祉実践は、行動様式・行動・行動体制という三者間の動的な相互関連の中で展開していると考えられる。さしあたりその関連性を図示すると図1のようになる。

3.1 外行動と内行動

行動を広く捉えると、「内行動（covert behavior）」と「外行動（overt behavior）」とに分けて考えることができる⁹⁾。外行動は、外から観察することのできる行動である。内行動は、外からは観察しえない当事者の心の中での行動である。内行動は、情動的体験、知的な思考、外界についての知覚などを含む。行動の主体が外行動を行なっている場合、同時に、その主体の内部においては内行動としての経験の流れが存する。たとえば対人福祉サービスを行なっている主体の内部では、感情、思考、認識などの様々な内行動が進行している。さきに述べた福祉実践に伴う“厚みのある体験”は、「内行動」の豊かな内容を示している。

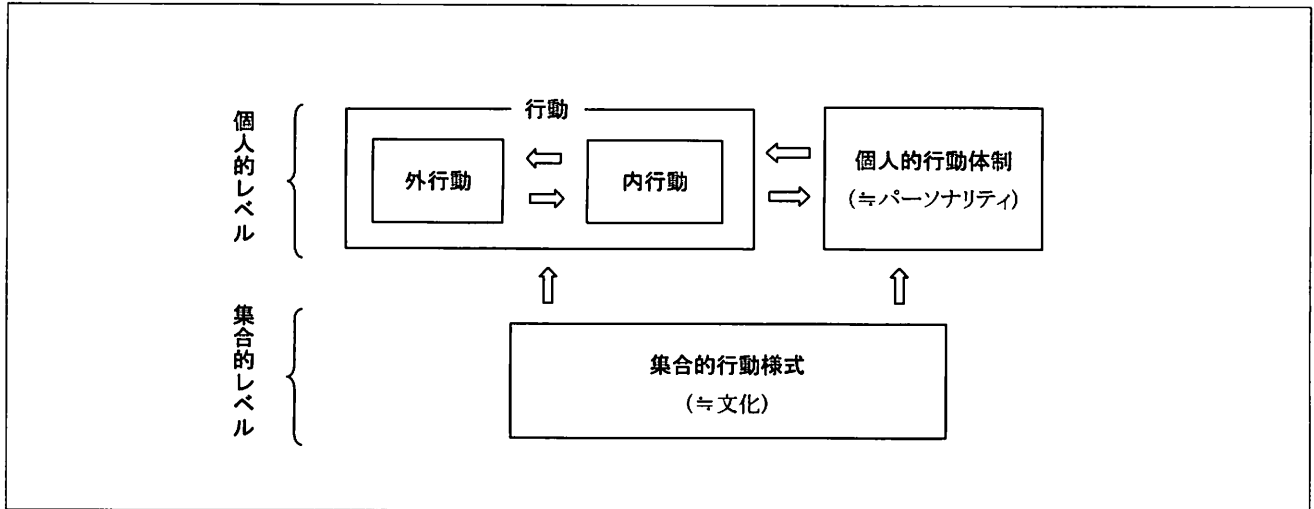


図1 行動・行動体制・行動様式の相互関係

福祉実践を把握するうえでは、「行動」よりも「行為」という概念を用いることも可能である。ただし、行為（action）に関しては、たとえばSchutz（1973＝1983:135-136）による「前もって考えられた企図にもとづいている進行中の過程としての人間の行動（下線は引用者）」といった概念規定が想定されがちである。この規定において行為は、下線を引いた2つの側面によって成り立つものとされている。この二側面は、それぞれ「事前になされる、行為についての想像」、「生き生きとした経験としてとらえられるような、進行中の行為」とも言い換えられている。

この概念規定それ自体に問題はないが、このような規定は、外行動を主とし内行動を従とする思考傾向を生むのではないだろうか。「前もって考えられた企図」は内行動にあたり、「進行中の過程」は内行動を同時に伴う外行動にあたる。「進行中の過程」は内行動と外行動の双方にわたるが、この概念を用いる研究者においては「進行中の過程」は外行動を中心に考えられやすいであろう。だとすると「前もって考えられた企図→進行中の過程」として規定される行為は、「内行動→外行動」という枠組で理解されやすい。この場合の内行動は、「（これからなされる）何らかの外行動についてのイメージ」という位置づけとなる。

しかしながら、むしろ「外行動→内行動」という表現のほうが適した人間の営みもある。たとえば、何らかの外行動の進行の結果として、心の中に内面的体験（＝内行動）が展開してゆく、という場合がありうる。その典型例は「修行」という営みに見ら

れる。修行とは、「身体を通して心を深め鍛える営み」である（岸本1958:63）。修行においては身体的な活動がなされるが、第一義的な目的は主体の内面を鍛えることにある。後に規定する用語を用いれば、「主体の内面を鍛える」とは、個人的行動体制を形成・向上させることである。

日本においては多くのソーシャルワーカーが、F. P. Biestekによるケースワークの7原則を大切にしている。その原則4「受容（acceptance）」では「自己覚知（self-awareness）」に言及されている⁶⁾。「自己覚知は、自己を受容することに結びつく。そして最終的には他者を受容することに結びつく。諸問題に対する自分自身の態度、感情、反応を認識することは、困難に対する他者の態度、感情、反応を受容することを助ける。」同じ箇所、Hamiltonの著書から次の言葉が引用されている。「実習中、学生は手助けを受けつつ、利用者の感情に気づいたり、利用者の感情に反応したりするようになる。自分の誤りについて議論し、利用者やスーパーバイザーへの自分の反応を分析することを通して、学生は徐々に、相互作用の意味を理解するようになる。（下線は引用者）」

自己覚知に関するここでの議論においては、ソーシャルワークの対象者側の感情とともに、実践主体の側の反応への着目も見られる。実践主体の側の反応には、対象者に対する直接的な外行動とともに、実践主体の側の態度や感情といった内行動も含まれる。自己覚知は実践主体の側の内行動を念頭におく概念であるといえるが、さらに自己や他者を理解し受容するという態度の深まりへの着目も見られる。

つまり個々人の行動の背景にある「自己」の成長への着目という要素をも含んでいる。

3.2 個人的行動体制と集合的行動様式

個々人の行動の背景にあるものとして、「個人的行動体制」を想定することができる。それは人間の心の中に形成されている“かまえ”であり、それに基づいて、種々の行動が生じる⁷⁾。個人的行動体制は、一般的には「パーソナリティ」という語で表現される。行動体制から行動が生ずるという関係を矢印で示すと「行動体制→行動」となる。

行動体制はいかにして形成され、維持され、変化してゆくのか。人間以外の動物においては、行動体制の大部分は生物学的構造として予め決定されている。しかし人間においては、行動体制はより可塑的であり、成長の途上で行動体制が形成される面も大きい。たとえば子どもは親からのしつけや遊び仲間とのやりとりを通して成長する。この場合、行動体制と行動の相互関係は「行動→行動体制」と表現される。

さて、行動および行動体制についての以上の議論は、個人の場におけるものとしてすすめられてきた。しかしながら、人間の行動は集合的な次元における「行動様式」が重要な役割を果たすと考えられる。ここでいう集合的行動様式は、より一般的には「文化」という概念によって把握される。

「文化」概念に関して、Geertz (1973=1987: 77-79) は「行動を支配する制御装置—計画、処方、規則、指示 (コンピューター技師が『プログラム』とよぶもの)—として見られるべき」とし、人間はみずからの行動を秩序づける文化的プログラムに何よりも依存する動物だと述べている。「文化パターン—意味ある象徴の体系—に従わない人間の行動は、事実上統制し難く、無目的的行為と感情的爆発のカオスにすぎず、そういう人の体験はほとんど形を成さない。」

“行動を秩序づけるプログラム”という特質を強調するために、ここでは「文化」よりも「集合的行動様式」という言葉を用いてゆきたい。行動様式が行動を秩序づける際には、行動体制が介在していると考えられる。行動様式は、何らかの行動をとおして個人的行動体制の中にくみ入れられる。たとえば、学校でふだんの授業や日課、運動会などの行事の中

で“集団主義的”行動をくりかえし経験することをとおして、“集団主義的”行動様式が生徒たちひとりひとりの個人的行動体制に内面化される。この方向性を矢印で示すならば、「集合的行動様式→行動→個人的行動体制」と表現できる。

集合的行動様式が複数の人々のそれぞれの個人的行動体制の中に内面化され、共有される場合、次のような「象徴」のはたらきを念頭におく必要がある。「文化は、象徴に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系を表している (Geertz 1973=1987: 148)。」「象徴」と「概念」は、次のような関係にある。「象徴は、どんな対象、行為、事件、性質、関係にも用いられ、概念 (a conception) —概念とは象徴の『意味』である—の媒介物 (a vehicle) として働くものを指し」ている (Geertz 1973=1987: 151)。

つまり「象徴」は、感覚器官によって直接的に把握するもの—知覚しうる対象—である。そのような「象徴」に接することによって主体の内部に喚起される何かが、「象徴の意味=概念」である。逆にいえば、意味は、知覚しうる対象に固定されることによって保存される。たとえばGeertzの次の議論のように、宗教的な感情は、知覚しうる対象である十字架と結びつけられることによって、人々の間で保持されやすくなる。この場合、十字架は「象徴」であり、宗教的な感情は「象徴の意味=概念」である。

「十字架は、それについて語られ、心に思い浮かべるものであり、困ったときに空に十字を切り、優しく首にかけた十字架にさわるなどすべて象徴である。『ゲルニカ』と呼ばれる絵をかけたカンバスの空間も、チュリングと呼ばれる色を塗った石の薄片も、『実在』という言葉も、あるいは『-ing』という形態素もまた象徴である。それらすべては象徴であり、少なくとも象徴的要素をもつ。なぜなら、それらは、観念の理解できる形象化、知覚しうる形に固定した、経験からの抽象、思想、態度、判断、希望、信仰の具体的表現である。」 (Geertz 1973=1987: 152)

Geertzの説明において、「象徴」と「象徴の意味」はかなり広義のものとなっている。ここでの「象徴の意味」は、象徴によって内面に喚起される“何か”である。象徴が外行動を導く場合、象徴が外行動へ

の内的動機を喚起し、次に実際の外行動がなされる、という段階をふむと考えられる。

十字架・絵画・石の小片等も象徴の一種だが、言語は言うまでもなく象徴の一種である。ソーシャルワーカーの倫理綱領は、福祉実践に関する理想あるいは規範を言語によって表現したものである。言語のかたちで表現されることによって、福祉実践に関する行動様式は人々の間で共有されやすくなる。なお、福祉実践の現場における言語以外の象徴の一例として、施設の敷地内における彫像やレリーフ、絵画などをあげることができる。

さきにみた「福祉実践の哲学」は、多くの場合、言語によって表現された集合的行動様式というかたちで存していると考えられる。それは個々人の行動体制のうちに受け容れられることによって、現実の生活のなかで作用する。たとえば倫理綱領は、個々のソーシャルワーカーの個人的行動体制の中にとり入れられることによって、ソーシャルワーカーの行動を方向づける。

4. 個人・集団・社会 — 行動様式の生成

4.1 行動様式の生成における個人の位置づけ

行動様式は、社会においてある程度の統一性もちつつも、その中に多様性の存在を許すものだと考えられる。多様性があることにより、環境の変化に適応しつつ統一性を維持していくことも可能となる。この「多様性の中での統一」に関しEliot (1948=1976:239-243) による「個人の文化」「集団の文化」「社会の文化」という区分を参考にしうる。

「社会の文化」は、日本文化、アメリカ文化といった、いわゆる民族文化を主としてさしている。社会の文化の中核的要素の一つは言語である。3つのレベルの文化の根本をなすものは、社会の文化である。個人の文化は集団の文化に依存し、集団の文化は社会の文化に依存する⁽⁹⁾。

「個人の文化」の具体例として示されているのは、文学作品、とくに詩の創作である。多くの詩は、特定の個人による創作活動をとおして書かれる。その作品は、社会の文化の中核である言語によって、あるいは、詩に関する社会あるいは集団の文化的伝統を背景に書かれる。言語によって表現された作品は「個人の文化」に属するが、その作品は他者に伝達・

理解され、共有されうる。

文化は3つのレベル間で、あるいは各レベル内部において、相互に影響しあいつつ維持・発展している。文化の維持・発展は基本的には計画しえないとEliotはいう。文化とは機械のようなものではなく「一本の樹木」のようなもので、「生長せざるを得ない或るもの (Eliot 1948=1976:371)」である⁽⁹⁾。

Eliotによる以上の議論のうち、「社会の文化」は、いわゆる民族文化のみに限られないと考えるべきであろう。たとえば山村(1973)は全体社会の文化に関して「伝統的文化」と「現代的文化」を区分している。「伝統的文化」は、社会の長い時間的スケールにおいて、その社会独自の歴史的な過程の中で形成されてきた文化的伝統である。「現代的文化」は、現代社会の構造とその変化に対応した文化、あるいは資本制社会、大衆社会、工業化社会といった社会の全体構造がその成立に要求する社会的性格等を指している。個々の福祉実践もこのような「社会の文化」の影響下で行なわれているといえる。

「個人の文化」は、これまで検討した「集合的行動様式」という概念には当てはまりにくい。ただし、集合的行動様式の中核的構成要素である「象徴」のはたらきを念頭におきつつ、「個人の文化」は「個人的行動様式」と呼ぶことができるかもしれない。集合的行動様式に含まれる象徴が個人の側に取り入れられた後、個人の側によって象徴を用いた新たないわば個人的象徴が形成される。さきにふれた詩の創作はその典型例だと考えられる。

なお、特定の諸個人が社会あるいは集団内において持つ意味に関して、Halbwachs (1955=1958:28) は次のような指摘を行なっている。

「…留意すべきことは、宗教とか、家族精神とか、愛国心とか、政治的意見とか…そのような諸種の一般的動機は、すべての人間やすべての集団の成員にたいして、画一的作用をおよぼすのではないということである。…あらゆる社会には、一つの漸進的等級がなければならない。つまり、共通の観念や情緒にすこぶる敏感で、これをもっともよく表示するように思われるひとたちから、これらにたいしてひどく無関心で、いかにゆすぶってみても興味をおこさせることがきわめてむずかしいひとたちに至るまでの等級である。この成員間の多様性、集団構造内の分化は、集団を特色づける諸傾向や、集団が成員に

提示し強要している社会的動機などの存続をはかり、かつはその力を維持する唯一の手段なのである。(下線は引用者)⁽¹⁰⁾

引用文中の「共通の観念や情緒」「社会的動機」などは、文化の諸局面をさしている。下線部分は“社会の文化あるいは集団の文化に敏感である諸個人”と言い換えることができる。社会の文化や集団の文化から個人への影響のありようには個人によって違いがある。たとえば「現代的文化」に強く影響を受ける人もいれば、成長の過程で「伝統的文化」を深く身につける人もいるだろう。

福祉実践においては、特定の福祉施設をリードし、その施設における福祉実践を方向づけていくような、特定の個人(たとえば施設長)を想定できる。そのような個人は、その特定の福祉施設という集団における文化に敏感である個人となっている場合が多いであろう。

さきにふれた糸賀一雄も近江学園の施設長などとして障がい児(者)への福祉実践に関わった。彼の書いた『この子らを世の光に』などの著作は、詩の創作と同様、さしあたり「個人の文化」の形成の一例として理解できる。その著作の内容は、伝統文化などの「社会の文化」や近江学園などの福祉施設における「集団の文化」からの影響のもとで書かれている。

4.2 行動様式の生成における集団の位置づけ

「集団(group)」という概念は、「共通のアイデンティティ(少なくともある種の統一感、特定の共通する目標や共有された規範)をもつ複数の人々」といった比較的限定された意味で使われる場合が多いが、その一方で、「あらゆる集合、あるいは、あらゆる複数の人々」という広い意味で使われる場合もある(Theodorsonら1969:176)。ここでは後者の比較的広い意味に沿って、行動様式の生成における集団の位置づけについて考えてゆきたい。そうすることで、行動様式の生成の多様なありようを検討することができる。

行動様式の生成における集団の位置づけを考えるにあたって、G. Lefebvreによる議論は示唆的である。そこで彼は、「集合心性(mentalité collective)」という語を用い、フランス革命の時期における集合心性の形成について次のような説明を行なっている。フ

ランス革命の過程を理解するには、啓蒙思想家の革命理念の形成に注目するだけでは不十分である。普通の人々、つまり農民や都市の住民における漠然とした、しかし何らかのきっかけさえあれば実践へと駆り立てられるような心理状態の形成に注目する必要がある。

フランス革命の初期段階における群衆がいかなるものであったかを説明するにあたり、彼は集団を「集合体(agrégat)」「半意識的集合体(agrégat semi-volontaire)」「結集体(rassemblement)」の3種に区分している。

「集合体」は、“純粋な群衆”と言いかえられている。「純粋状態においては、群衆は、諸個人の、自覚されていない一時的な『集合体』である(Lefebvre 1934=1982:11)。」つまりここで言う「集合体」は、諸個人のあいだに共通要素が存せず、異質な要素からなる集合である⁽¹¹⁾。

「結集体」は、行動についての明確な自覚が諸個人に存するような、行動を志向する集まりである。革命における事例としては、1792年6月20日の示威運動などがあげられている。革命時における「結集体」は、「多少とも組織性をもった行動や祝典参加のためなどに、さまざまな個人が、共通の情念ないし同一の理性的判断に基づいて、自覚的に集まったもの」であった。(Lefebvre 1934=1982:6-7)

「半意識的集合体」は、「集合体」と「結集体」との中間に位置する集まりの総称である。「『集合体』と自覚された『結集体』との間には、中間的な性格の多くの結合形態がある(Lefebvre 1934=1982:13)。」

フランス革命の初期においては、さまざまな「半意識的集合体」が集合心性の形成と「結集体」の準備に大きな役割を果たした。農民における半意識的集合体の例としては、共同の農作業、日曜ごとのミサ、週市などがあげられている。これらの「どれをとっても、人々の集まりは、意識的に形成されたものではない。人々が、畑仕事やミサや週市やパン屋に出掛けるのは、夫々、自分たちのやるべきことのために行くのであって、徒党を組むために出掛けて行くのではない。…彼らにとって、仲間と会えるのが喜びなのであり、…大勢が集まるということは、本来の目的ではないものの、欠かすことのできない気晴らしであり、楽しみなのである。(Lefebvre 1934

＝1982：15-16)」半意識的集合体の例としては、パレ・ロワイヤルでの集まり、市場やパン屋の店先の行列、小教区の選挙集会、選挙に関するニュースを聞くための人だかりなどもあげられている。

このような半意識的集合体において人々は、家庭や職場のような社会集団から、一時的に離脱している。そのような離脱のもつ意味を、Lefebvreは次のように指摘する。半意識的集合体にまぎれこむことによって、個々人は、彼の日常生活を枠づけている社会集団の規制から脱し、より広い結びつきに特徴的な考え方や感じ方に、はるかに敏感になりうる。“より広い結びつきに特徴的な考え方や感じ方”としては、「社会が成立するためには不可欠な基本的集合観念、即ち、社会の成員はその生命と財産を尊重される権利を有するといった考え」、「ひとつの国民に属しているという意識」などが考えられている。

半意識的集合体の中での集合心性の形成は、「心的相互作用」というのはたらしによって説明されている。心的相互作用は、具体的には、「語らい」「印刷物、歌謡、演説などによるプロパガンダ」などを通してはたらく。「人々は無意識の形で、計画的な意図などはなしに、日常的な語らいを通じ、ものの考え方・感じ方を共にするような心的作用を及ぼし合っていた。」(Lefebvre 1934＝1982：16-28)

以上の議論に関し、福祉実践のありように即して若干の検討を試みよう。特定の福祉実践をしようという自覚を伴う福祉実践主体の集まり（例：福祉施設の職員集団）は、「結集体」にあたる。また「半意識的集合体」に関する議論に照らし合わせて考えると、福祉実践への意志を必ずしも明確に持たないような集まりや相互作用もまた、何らかのはたらきをしている可能性がある。

以上の議論とやや重なる事例として、下村湖人の「煙仲間」運動への関わりが糸賀一雄の福祉観に対して大きく影響した、といった例をあげることができる（蜂谷 2010）。糸賀は『この子らを世の光に』の最初の章を「友垣」と題し、様々な人々との出会いやふれあいが、近江学園における実践や自分自身の考え方に影響したことを紹介している。

なおLefebvre（1934＝1982：29-38）は、心的相互作用を通して進行するイメージの「平準化」（例：敵役としての“悪しき領主”と“苦しむ階級”という典型的イメージの形成）や、集合心性に結びついて

くる感性的特徴（例：フランス革命の際の民衆における「不安」と「希望」）について論じている。革命的心性の感性的特徴である不安と希望は、革命的結集体を集合体から区別するところの行動への指向を説明する。

平準化によって形成される典型的イメージ、および、集合心性の感性的特徴に関するLefebvreの議論は、社会福祉実践研究に対して、次のことを示唆する。福祉実践を把握するにあたっては、実践のための明確なプログラムではない、漠然としたイメージや情緒にも注目する必要がある。漠然としたイメージや情緒は、外からの観察者にとって非現実的なもののように見えるとしても、当事者にとっては意味のあるイメージや情緒でありうる⁽¹²⁾。

5. まとめと展望

5.1 本稿のまとめ

本稿はソーシャルワーク実践、あるいはより広く福祉実践における実践主体の経験の多様性を把握するための基礎視角を検討することを目的とした。その結果を整理して示すと次のようになる。

- 1) 福祉実践には能動的・主体的な側面があり、福祉政策から規定されるとともに福祉政策にはたらしかけもする。福祉政策と福祉実践の相互関連は重要な視点だが、その視点のみにとらわれないことが、福祉実践主体の経験の多様性を把握するためには意味がある。
- 2) 倫理綱領に代表されるような価値観や規範のはたらきとともに、本稿では、現場で実践に携わる人間の弱さ・苦しみ、あるいは喜びなどの現実をも適切に位置づける視角の検討が目指された。
- 3) 福祉実践を「行動」という観点から見た場合、「外行動」のみでなく「内行動」にも着目することにより、実践主体の「厚みのある体験」がより適切に把握されうる。現実の福祉実践における「行動」に対し、倫理綱領などのような価値観や規範は、言語という象徴で表現された「集合行動様式」の一種として位置づけられる。
- 4) 実践主体の内部において「行動」の背景にあるものとして、「個人的行動体制」（あるいはパーソナリティ）が想定される。「個人的行動体制」

に基づき「行動」が生じるという側面とともに、「行動」を通して「個人的行動体制」の形成される側面もある。後者の側面の一例として、福祉実践を通しての人的成長を位置づける。

- 5)「集合的行動様式」は文化という概念とほぼ重なるが、文化に関しては「社会の文化」「集団の文化」「個人の文化」というレベルを想定しうる。「個人の文化」はいわば「個人的行動様式」として、象徴のもつはたらきを念頭におきつつ理解しうる。社会や集団の文化に規定されつつ、個人は「個人の文化」の生成を通して社会や集団の文化にも影響を与える。
- 6)「集団」という概念を緩やかにとらえることにより、複数の人々による多様な相互作用を視野に入れて、行動様式の生成の多様なありようを把握しうる。たとえば、福祉実践への意志を明確に持たないような集まりや相互作用が、結果的に福祉実践に向けた行動様式の生成に影響を与えることがある。

5.2 “実践知”の充実・豊富化と“福祉実践の主体的意味”の探求

本稿の検討は、ひとつには、福祉実践における「実践知」を充実させるという方向に関連するものである。ソーシャルワークの3要素とされる「価値」「知識」「技術」に基づき、杉野（2011）はソーシャルワークの知を「理念知」「理論知」「実践知」に分けている。「理念知」や「理論知」は、実践に応用しようとする過程で、実践に役立つかたちの「実践知」へと変形される。そして「実践知」は、「理念知」や「理論知」にもフィードバックされる。

このように福祉実践に役立つための知識を形成してゆくことは言うまでもなく重要である。この“実践知の充実・豊富化”と言うべき営みを把握する上で、行動・行動体制・行動様式の相互関連という視点が活かされうると考える。ただし、それと同時に、福祉実践に関わる人たち自身にとって福祉実践はどういう意味をもつのか、という視点にもまた、目を向けることができる。いわば、福祉従事者にとっての“福祉実践の主体的意味”への着目である。

本稿の結びに、糸賀一雄（2009：45-46）による、福祉従事者における“愛情の育ち”に関する言及をとりあげたい。「…本当に共感できるかどうかは年季

がかかります。…理屈が理屈でなくて、自分の本当の心の動きにまで、何年かかってもいいではありませんか…」この愛情の育ちは、長い時間をかけて進む福祉従事者の自己成長、あるいは個人的行動体制の形成を指し示している。

行動の背景にある個人的行動体制の形成、あるいは自己成長というありようを、あらためて実践知に適切に位置づけることは、ソーシャルワーク研究にとって意味のある課題だと考える。その検討においては、ソーシャルワークにおける自己覚知、またそれを前提にしたソーシャルワーカーによる「自己の活用（use of self）」（Reupen 2007）に関する議論と照らし合わせることも有意義であろう。

また、“福祉実践の主体的意味”という観点から見るとするなら、福祉従事者の心に生じる“愛情の育ち”は、実践に役立つばかりではなく、福祉従事者自身にとっての喜びともなる。つまり自分自身の人的成長や心境の深まりは、福祉従事者にとって生きがいの一部、あるいは“ケアの肯定的側面”でもありうる（中山2014）。

“愛情の育ち”といった事柄は、福祉の制度・政策の歴史的展開という枠組ではほとんど無視されるような事柄かもしれない。しかし社会福祉の歴史を深みのある多様な潮流からなるものと捉えようとするなら、制度・政策の発展といういわば表面流とともに、多様な実践主体による多様な潮流を見いだすことができるであろう。“愛情の育ち”といった事柄を重視する潮流は、いわば底層流として、福祉の歴史の表面からは見えにくいが根強く流れ続けている行動様式の一例と言えるのではないだろうか。

糸賀一雄を写した写真のひとつに、ともに近江学園を創設した池田太郎、田村一二、そして糸賀の3人が、円形のテーブルを囲んで座っている写真がある。そこからは、施設の日常で起きた些細なことや、これからの夢を語り合うという、くつろいだ雰囲気を感じられる。もしもその語り合いのそばに、今を生きる福祉従事者が居合わせることができたとしたら、その語り合いには共感できる事柄も多く含まれているであろう。そのような共鳴の可能性を思い描きつつ、現存する資料を通して同じ可能性を探ることも、意味のあることだと思う。

注

- (1) この段落と前段落における議論は、「価値経験」に関する岸本 (1961: 20) の議論にもとづいている。
- (2) この段落における議論は副田 (1975: 325, 331-333) の議論に基づいている。
- (3) 実践主体の能動性を重視する吉田の姿勢に筆者も共感する。その一方で吉田が社会事業史に明確な時期区分を行ない、それに合わせて社会事業における主要な出来事を叙述するという仕方には若干の違和感をもつ。そのような叙述法は、社会事業を「歴史的社会的実践」として把握する立場と関連していると思われる。「歴史的社会的実践は、弁証法的実践で、資本主義の歴史的構造的必然から実践をみることである (吉田 1974: 9)。」政治や経済の領域における変化が社会事業のあり方に影響を与えるという視点も、確かに意味がある。しかしこのような叙述法においては、実践主体の能動性の重視という問題意識が十分に活かされうるのであろうか。時期区分の重視は、福祉実践史の中になんらかの法則性を見出だそうとする志向性を背景にしていると推測される。けれども、法則性の探求を重視しない研究方法を探索することも、実践主体の能動性の重視という問題意識を活かすことに結びつくのではないだろうか。
- (4) 副田 (1984: 78-80) を参照。
- (5) 「外行動」「内行動」という区分は、たとえば、岸本 (1961: 35) に見られる。
- (6) 以下の引用はBiestek (1957: 80) からのものである。引用については翻訳書 (田代ほか 1965: 133) を参考にしつつ訳した。Biestekの著書中のHamiltonの文章の引用は、以下の著書からのものである。Hamilton, Gordon (1951) *Theory and Practice of Social Case Work (second edition)*, Columbia University Press, p.43.
- (7) 個人的行動体制に関するここでの議論は、岸本 (1961: 35) を参考にしている。岸本は、個人の場における宗教を、分析的に「信仰体制 (かまえ)」と「宗教的行動 (おこない)」に分けている。宗教的行動は「宗教意識 (内行動)」と「宗教的行為 (外行動)」に分けて考えられている。宗教意識は「宗教体験 (情意的)」と「宗教的思惟 (知的)」に区分されている。
- (8) 特定の福祉施設の職員が多くによって共有されている行動様式は、「集団の文化」の例と考えられる。またソーシャルワーカーの倫理綱領も、福祉実践主体によって構成される比較的大きな集団における「集団の文化」の例といえる。
- (9) そのような樹木にあたるもの、すなわち文化的プログラムのはたらきのある程度まとまりをもった総体を、中田 (1982: 14) は「文化体」とよんでいる。各文化体には「求心性と遠心性、自同性と自異性、統合性と拡散性といった、対立的な諸傾向の多様な絡み合い (中田 1982: 63)」が見られる。
- (10) 本稿の引用文において、…という記号は (中略) を意味する。
- (11) なおLefebvreは、「集合体」は厳密に言えば理念型でしか存在しないと考えている。彼は、人類においては純粋な集合体、つまり純粋状態の群衆は存在しない、と述べている。それは、人類においては、集合体の構成メンバーは常に何らかの程度に集合心性を帯びているため、そのメンバーが相互に完全に異質なものとなることは決してない、という理由による。
- (12) 中山 (1993) においては、このような観点を参考にして糸賀一雄の福祉実践イメージを検討している。

文献

秋山智久 (1982) 「『社会福祉哲学』試論」『社会福祉研究』30, 14-19.

- 秋山智久 (1989) 「援助の倫理」『NHK社会福祉セミナー 10月-12月』日本放送出版協会, 16-21.
- Biestek, Felix. P. (1957) *The Casework Relationship*, George Allen & Unwin. = 1965 (田代不二男・村越芳男訳) 『ケースワークの原則 - よりよき援助を与えるために』誠信書房.
- Eliot, Thomas Stearns (1948) *Notes Towards the Definition of Culture*, Faber & Faber limited. = 1960 (深瀬基寛訳) 「文化の定義のための覚悟」『Eliot全集 第五巻』中央公論社, 225-378.
- Geertz, Clifford (1973) *The Interpretation of Cultures*, Basic Books, Inc. = 1987 (吉田慎吾ほか訳) 『文化の解釈学 I』岩波書店.
- 峰谷俊隆 (2010) 「糸賀一雄と下村湖人: 『煙仲間』運動を通して」『社会福祉学』50 (4), 42-54.
- Halbwachs, Maurice (1955) *Esquisse d'une Psychologie des Classes Sociales*, Librairie Marcel Riviere et Cie. = 1958 (清水義弘訳) 『社会階級の心理学』誠信書房.
- 糸賀一雄編 (1954) 『勉強のない国』国土社.
- 糸賀一雄 (1965) 「この子らを世の光に」柏樹社.
- 糸賀一雄 (2009) 『糸賀一雄の最後の講義 - 愛と共感の教育 [改訂版]』中川書店.
- 岸本英夫 (1958) 『宗教神秘主義』大明堂.
- 岸本英夫 (1961) 『宗教学』大明堂.
- Lefebvre, Georges (1934) "Foules Révolutionnaires", *Annales Historique de la Révolution Française* 1. = 1982 (二宮宏之訳) 『革命的群衆』創文社.
- 中田光雄 (1982) 『文化の協応』東京大学出版会.
- 中山慎吾 (1993) 「社会福祉実践とイメージ (I) - 糸賀一雄の福祉実践イメージに関する社会学的考察」『社会学ジャーナル』18, 78-118.
- 中山慎吾 (1994) 「社会福祉実践とイメージ (II) - 糸賀一雄の福祉実践イメージに関する社会学的考察」『社会学ジャーナル』19, 100-132.
- 中山慎吾 (2014) 「障害児 (者) に関わる人々と『ケアの肯定的側面』」, 糸賀一雄生誕100年記念事業実行委員会『糸賀一雄生誕100年記念論文集 生きることが光になる』223-238.
- Reupert, Andrea (2007) Social Worker's Use of Self, *Clinical Social Work Journal*, 35: 107-116,
- Schutz, Alfred (1973) *Collected Papers 1: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff. = 1983 (渡辺光ほか訳) 『社会的現実の問題 [I]』マルジュ社.
- 副田義也 (1975) 「福祉における政策・運動・実践」副田義也ほか (編) 『現代社会学』日本放送出版協会, 312-348.
- 副田義也 (1984) 「社会学の対象、方法と仕事」『社会学ジャーナル』7 (1 & 2), 57-84.
- 杉野昭博 (2011) 「ソーシャルワーク理論の展開」平岡公一・杉野昭博・所道彦ほか『社会福祉学』有斐閣, 79-100.
- Theodorson, George A. & Theodorson, A. G. (1969) *A Modern Dictionary of Sociology*, Barnes & Noble Books.
- 山村賢明 (1973) 「社会化研究の理論的諸問題」, 日本教育社会学会編『教育社会学の基本問題』東洋館出版社, 92-111.
- 吉田久一 (1974) 『社会事業理論の歴史』一粒社.

Reconsideration of a Basic Perspective to Understand the Diversity of Social Work Practice: Focusing on the Relationship Among Culture, Groups, and Individuals

Shingo NAKAYAMA

Individuals involved in social work practices are making various “choices” at every moment in multi-dimensional aspects such as emotion, thought, perception, and ethics. To understand the diversity of practice-based experience, this study attempts to reconsider a basic viewpoint for the study of social work practice. As a matter of fact, social work practice is a type of “behavior.” To understand “behavior,” we can focus on not only “overt behavior” but also on “covert behavior.” Furthermore, we review the concept of “personality (personal compound trait for behavior),” which is behind the actions of each individual. Additionally, we review the concept of “culture (collective behavior patterns),” which is a program that formulates individuals’ behavior. Social work practices are conducted in the dynamic interrelationships among behavior itself, personality (personal trait for behavior), and culture (collective behavior patterns). By focusing on the flexible function of “individuals” and “groups” for the formation of culture, we can accurately understand the diversity of social work practice. We examine the flexible function of individuals referring to cultural theories of T. S. Eliot and M. Halbwachs. Moreover, we examine the flexible function of groups referring to G. Lefebvre’s theory on the formation of collective mentality.

Key Words: Social Work Practice, Diversity of Experience, Culture, Personality